

## 1、テキスト

「働くもの」「二」。第8段落。198頁後ろから4行目～199頁後から6行目まで。

## 2、テキスト要約（前回のキーワード、キーセンテンス）

この段落では、経験界の成立において、「超越的なものを内在し、非合理的なるものを合理化する」「手段」としての「時の範疇」に巡って論じられている。

- ① 時の範疇においては、「一々の点が内在的なると共に超越的意義を有」している。また、その全体も同じく「内在的なると共に超越的」である。ここで、「超越的」というのは、非合理的であり、思惟すべからざる「経験内容」を指している。  
「内在的」というのは、経験内容が悟性、つまり統覚、「考える」ことによって思惟し得るものになる。いわゆる「超越的なものを内在化する」「非合理的なるものを合理化する」ことである。  
こうして、「時間的なる物の概念」（時においてある物の類概念）は「内在」と「超越」、「合理」と「非合理」の両面を有していると考えられる。
- ② もしかかる両面が「合致せざる」場合、つまり、経験内容は思惟を越えて、非合理的なるものの合理化が成立できないとき、「時の背後に変ぜざるもの」、即ち「基体」が考えられる。例えば、経験界において、個々の特殊の表象の背後にそれらを統一する一般的ななるもの（物の類概念）のようなものがあると考えられる。以前紹介したように、経験的知識（個物）において、一般と特殊との間に間隙があり、その概念的統一はまだ「矛盾的統一」に徹底していない段階にある。
- ③ このような経験界の統一が「矛盾的統一」に徹底せられるにつれて、「時間的なる物の概念」もその根柢に透徹して、「内在」と「超越」、「合理」と「非合理」の「両面が合一」する。その時、「物の概念から力の概念に到着せねばならない」という。つまり、特殊の背後にある一般的ななるもの、基体が消えてしまい、「物」（物の類概念）がなくなって、物理の世界における「力」（働き）のようなものに還元される。
- ④ この場合、「特殊と特殊（個物と個物：引用者）が直ちに相関係する」「場所」が成立するのである。  
以上のことを西田は次のようにまとめている。  
「純粹統覚によって成立する経験的物の概念が自己自身の根柢に透徹する時、与えられたる経験内容其者、即ち思惟に超越的にして純粹統覚に内在的なるもの、換言すれば特殊なるものが直ちに相関係する」。
- ⑤ こうして、「現在と現在（引用者：特殊と特殊、個物と個物）との直接の関係を成立せしめる「時の範疇」は経験界の統一の徹底した様相である「矛盾的統一」に他ならない。
- ⑥ 他方、「非合理的なるものの合理化は、時の範疇に於いて尚その統一に徹底することはできない」と西田は断言している。なぜなら、時に於いては外に超越するもの（外的質料）を除去できるが、内に超越するもの（内的質料）を除去することは不可能である。
- ⑦ こうして、真に非合理的なるものを合理化する、超越的なものを内在化するには、

「単に経験内容が時に於いて統一せられる」のは不十分であって、「経験内容其者が時を含まなければならぬ」い。つまり、時は単に過ぎ去ったものではない、その背後に「動かないもの」がある。しかし、それは「物」の類概念のようなものではなく、「永遠の今」である。

- ⑧ したがって、経験内容は「直観の内容」として、「自同判断の主語となる時、時を内に包むといふことができる」。その場合、時は「現在の直線的系列」ではなく、「無限の重畳」である。
- ⑨ そのため、経験界を構成する純粹統覚は、「経験自身の直観」として、「すべての時を自己自身の中に映す永遠の今」に他ならない。
- ⑩ 西田は以上のような「直観の立場」・「永遠の今」の立場から「働くものを見ることができると主張している」。

### 3、「哲学的問い」

『善の研究』の時期では、西田の思考の出立点が「直覚」という「直接の知識」であったが、『働くものから見るものへ』では、「直覚は概念的判断の形式によって表現される」ので、「直覚も一種の知識」でなければならないといい、自らの出立点を「判断的知識」と主張した。このような初期から中期まで、西田哲学の「出立点」の転回をどのように考えるのか。また、非合理的なもの（直観）とその合理化（判断、反省）の葛藤をどのように考えるのか。「宗教的覚悟」のような最大最深の直観の合理化は可能であるのか。